

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|------------------|---|
| Title | 『新エロイーズ』における自然的善性の問題 |
| Sub Title | Le problème de la bonté naturelle dans "La Nouvelle Héloïse" |
| Author | 吉田, 修馬(Yoshida, Shuma) |
| Publisher | 慶應義塾大学倫理学研究会 |
| Publication year | 2010 |
| Jtitle | エティカ (Ethica). Vol.3, (2010.) ,p.31- 68 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20100000-0031 |

『新エロイズ』における自然的善性の問題

吉田 修馬

はじめに

ジャン=ジャック・ルソー（1712-1778）の思想の出発点である『人間不平等起源論』（1755、以下『不平等論』と略記）と、その到達点の一つである『エミール』（1762）との間には、その倫理思想に関して、一見すると、内容や力点の変容が見出される。二つの著作の間の違いとしては、さしあたり、以下のような三点を挙げることができる¹。

第一に、『不平等論』における人間の自然的善性（*bonté naturelle*）とは、主に自然人が他人に悪意を持ちえないことであったが、『エミール』では善を愛し悪を憎むという人間の傾向がそれに加えられている。第二に、『不平等論』では自愛心と憐れみ（*pitié*）が人間本性の二つの原理とされていたが、『エミール』では憐れみよりも良心（*conscience*）が重視されている。第三に、『不平等論』においては自愛心（*amour de soi*）と自尊心（*amour propre*）が区別され後者の弊害が強調されていたが、『エミール』では自尊心のうちでの、正当なものとの区別がより前面に表れている²。

しかし『エミール』では、このような見解の変容が、十分に説明されているとはいきれない。とはいえ、ルソーの表現は、『エミール』で突然変わったのではない。それを示しているのが、『エミール』などの主要著作が構想され執筆されたのとほぼ同時期に書かれた、彼の主著の一つである『新エロイズ』（1761）である³。

『新エロイズ』は書簡体による恋愛小説であり、文学的な研究で多く取り上げられている⁴。しかし「『新エロイズ』には、ルソー思想が百科全書的に投入されている。それで、それは、「ルソー大全」とも「ルソー思想の概説書」ともいわれる」⁵。さらに、『新エロイズ』は、「何よりもまず一つの組織的な実験の場であり、現実を理解するための、おそらく現代においてはもっとも有効な手段」⁶としての小説である、という指摘もある。そのような意味で、『新エロイズ』は文学作品ではあるが、ルソーの思想を研究する上でも重要な対象である⁷。

なお『新エロイズ』を扱った研究においては、特にクラランの共同体がさかんに論じられている。クラランの共同体についての描写の重要性を否定するわけではないが、本稿では、議論の対象をクラランの共同体に限定せずに、『新エロイズ』のテキストを読み解いていくことにする。

また、『新エロイズ』を解釈する際には、どの登場人物によるどの発言が、よりルソーの真意に近いのかという問題がある。もちろん本稿でも、それぞれの議論が、誰によってどの文脈で述べられたものであるかに留意する。しかし「第二の序文」で「友人どうしでは、お互いの心がとけ合うので、考え方、感じ方、言い方が似てくることに、私は注目します」(NH, II, SP, p.28)とあるように、主要登場人物による書簡は、基本的には、多かれ少なかれ、ルソーの思想のある面を反映しているとみなすことにする。

それでは、ルソーの主張は実際にはどのくらい、またどのように変容しているのであろうか。そして、変容しているとすれば、なぜその必要があったのであろうか。本稿では、上掲の三つの変容のうち、特に一つ目とかかわる、自然的善性の主張や自然的善性の格率に関して、『新エロイズ』を読解することを通して、ルソーの倫理思想の推移の一面を明らかにし、いくらか解釈を加えていくことにする。また本稿では、それらの作業を通して、『エミール』などの彼の他の主要著作を理解するための準備としたい。

以下、第一節では、『新エロイズ』の内容を簡潔に要約する。次に、

第二節では自然的善性の主張の内容について、第三節では自然的善性の格率に関連する論点について、『不平等論』と『新エロイズ』の二つの著作の間での異同を検討する。そして第四節では、『新エロイズ』を執筆したルソーの意図について検討しながら、『不平等論』から『新エロイズ』への変化の理由を考察し、『新エロイズ』におけるルソーの倫理思想の一面を明らかにしてみたい。

1. 『新エロイズ』の要約

物語の主な登場人物は、スイス人の貴族デタンジュ男爵の娘のジュリ、彼女の家庭教師であり恋人でもある平民のサン＝ブルー（仮名）、ジュリの従姉妹で恋人たちの友人のクレールの三人である⁸。彼らの友人であるイギリス人の貴族のエドワード・ボムストンや、後にジュリの夫となるロシア人の貴族のヴォルマル男爵も重要な役割を演じる。六部からなる物語の概要は、以下の通りである。

「第一部」では、若いジュリとサン＝ブルーの恋愛が語られ、クレールが二人の恋を見守る。サン＝ブルーは学問の上ではジュリの教師であり、学問論（書簡 12）や音楽論（書簡 48）を述べるが⁹、道徳に関してはジュリからさとされることが多い。

「第一部」の前半では、サン＝ブルーの高地ヴァレー地方への旅行が、主題を形成する（書簡 15 から書簡 25）。サン＝ブルーに旅費を援助するジュリに対して、彼は金銭を受け取っては名誉を失うと拒絶するが（書簡 16）、ジュリはそのようなサン＝ブルーこそ、名誉と財産とを混同しているとたしなめる（書簡 17）。書簡 23 は「ヴァレーの手紙」と言われる、高地ヴァレー地方の雄大な自然や素朴な住民たちを描いた著名な書簡であり¹⁰、それに続く書簡 24 では本当の名誉と偽りの名誉が区別されている。

「第一部」の後半になり、サン＝ブルーはジュリから、ジュリとのデートを我慢して、使用人のたちの結婚のために便宜を図るように依頼される

(書簡 39 から書簡 44)。サン＝ブルーは渋々ジュリの勧告に従い、ひがみっぽくジュリの徳を賛美し、彼女のおかげで他人の幸福に貢献できたというらみがましく彼女に感謝を表明する(ここでの彼は、熱烈にジュリを称賛する物語後半における彼とは対照的である)。ジュリが酒に酔ったサン＝ブルーの態度を叱責し、サン＝ブルーがそれに平謝りする話(書簡 50 から書簡 52)の後、書簡 54 の前後で語られるいわゆる「愛の夜」で、ジュリとサン＝ブルーは結ばれる。

しかし、その直後、サン＝ブルーとエドワードが、ささいな誤解から決闘沙汰となり、ジュリやクレールは二人の関係の修復に奔走する(書簡 56)。ジュリは、サン＝ブルー自身による書簡 12 の学問論や、書簡 24 の二つの名誉の区別や、書簡 34 の(祖国のため以外に血を流すべきでないという)傭兵批判を引き合いに出しながら、サン＝ブルーに言葉を尽くして、決闘を思いとどまるよう説得する(書簡 57)。

サン＝ブルーと仲直りをしたエドワードは、ジュリとサン＝ブルーの恋を応援するようになる。しかしジュリの父のデタンジュは、ジュリを、自分の命の恩人であるヴォルマールと結婚させようとする。エドワードは、自分自身が貴族でありながら貴族批判を展開し、デタンジュにジュリとサン＝ブルーの結婚を許すよう訴えるが、かえってデタンジュを怒らせてしまう(書簡 62)。

そこに、サン＝ブルーを弁護するジュリとその母親を、デタンジュ男爵が折檻し、その後でお互いに涙を流して和解するという事件が起こる(書簡 63)。これを境に、ジュリの(特に父親に対する)心境が変化する。そして「第一部」は、ジュリがサン＝ブルーとの子どもを流産したことを、クレールがほのめかして結ばれる(書簡 65)。

「第二部」を通して、ジュリは、恋人を取るか、両親がすすめる結婚をするか、という選択を迫られる状況に、少しずつ追いつめられていくことになる。エドワードは、再び貴族を批判しながら¹¹、ジュリとサン＝ブルーに駆け落ちしてイギリスで結婚するようにすすめる(書簡 3)。悩んだ

ジュリはクレールに判断を委ねるが（書簡 4）、クレールはどうなるうともジュリを尊重するから、自分で決断するようにと彼女を励ます（書簡 5）。結局ジュリは、両親を裏切っては自分も本当に幸福になることはできないとして、エドワードの提案を辞退する（書簡 6）。

サン＝ブルーと距離を置く必要を感じたジュリは、彼にエドワードを頼って都会に出るようにすすめる（書簡 7）。他方で彼女は、成功して名声を得ようとしてパリへと向かうサン＝ブルーを心配して、富よりも徳を、世間の称賛よりも自分の良心を尊重するように忠告し、悪人の不幸と善人の幸福を説く（書簡 11）。

そうして書簡 13 以降の「第二部」後半は、サン＝ブルーによるパリ滞在記が書簡の中心となる。書簡 14 を中心として、サン＝ブルーは社交界や都会の人々の偽善や悪徳を痛烈に批判しながら、書簡 16 では社会観察の方法論、書簡 17 と書簡 23 では演劇論、書簡 21 では女性論を展開する。そして泥酔して娼婦と一夜をともにしたことを懺悔するサン＝ブルー（書簡 26）を、ジュリが怒りつつも許す（書簡 27）という場面の後で、事態が急転する。「第二部」の最後の書簡 28 で、秘密にしていた二人の文通が、ジュリの母のデタンジュ夫人に露見し、彼らの関係に破局が訪れるのである。

次の「第三部」の前半は、サン＝ブルーとジュリが、何度も別離を語り続けるという、やや逆説的な交流が続く。まず冒頭では、結婚してドルブ夫人となったクレールは、サン＝ブルーに、ジュリの幸福のために、彼女をあきらめるように説得し（書簡 1）、サン＝ブルーがジュリと離れることをデタンジュ夫人に誓う（書簡 2）。

そして、母であるデタンジュ夫人の死をきっかけに、ジュリはサン＝ブルーに永久の別れを告げ（書簡 5）、クレールは失意のサン＝ブルーを慰める（書簡 7）。デタンジュ男爵は、サン＝ブルーに脅迫めいた手紙を送るが（書簡 10）、サン＝ブルーはそれに対して堂々とした答えを返す（書簡 11）。これに応じて、ジュリはもう一度サン＝ブルーに、永久の別

離を繰り返す（書簡 12）。

しかし、書簡 13 からのいわゆる「愛の種痘」の場面を経て、ジュリは心を変える。天然痘にかかったジュリは、意識がはっきりしない中、病気の感染を恐れずに彼女を見舞ったサン＝ブルーと再会し（書簡 13）、それに感動して今度はサン＝ブルーの愛を受け入れる決心をしたと書き送る（書簡 15）。

ところが突如として、クレールからサン＝ブルーに、ジュリの結婚を知らせる手紙が届く（書簡 17）。そして書簡 18 は「回心の手紙」と呼ばれる、ジュリの長大な告解である。そこでジュリは、和解した父親に説得されて、ヴォルマールと結婚したことを告げ、結婚式で体験した突然の回心について語り、サン＝ブルーに結婚や家族の神聖さやすばらしさを述べる¹²。

絶望したサン＝ブルーは、エドワードに自殺をほのめかす（書簡 21）。エドワードは、サン＝ブルーを励まし（書簡 22）、再び自分に立ち返り、人生を愛するために、世界周航の旅に参加するようすすめる（書簡 25）。こうしてサン＝ブルーは、今より成長した人間になって戻って来ることをクレールに宣言して、航海に出る（書簡 26）¹³。

数年後が舞台の「第四部」は、サン＝ブルーを心配するジュリからクレールへの手紙から始まる（書簡 1）。ヴォルマール夫人となったジュリは二人の息子の母となり、クレールも一人の娘の母になっているが、彼女は夫と死別している。そこに旅から帰ったサン＝ブルーが、クレールに帰還を知らせる（書簡 3）。ヴォルマールは、サン＝ブルーを自分たちの家に歓迎する意志を伝える（書簡 4）。書簡 6 では、サン＝ブルーがエドワードに、ヴォルマール夫妻との出会いを語り、書簡 9 ではクレールがジュリに、サン＝ブルーとの再会を伝える。

書簡 10 以降、サン＝ブルーはヴォルマール夫妻の人柄や領地経営の様子を、エドワードに詳細に書き送る。いわゆる「クラランの共同体」である¹⁴。書簡 10 では主に召使との雇用関係が説明され、書簡 11 ではエリゼ

という庭園の様子が描写される。またジュリは、サン＝ブルーに自分たちの子どもの家庭教師を依頼するつもりであることを、クレールに打ち明ける（書簡 14）。

しかし、一見、幸福で平穏であったクラランでの彼らの共同生活は、実は危険な平衡のもとに成り立っていたことが、明らかにされる。「第四部」末尾の「湖の手紙」とも呼ばれる書簡 18 で、サン＝ブルーは、ジュリと心中してしまいたい気持ちになったことをエドワードに打ち明けている。

これに続く「第五部」では、クラランの共同体の説明が進むとともに、友人たちの間で秘密が打ち明けられることが、一つのテーマになっている。

冒頭は、聞き役だったエドワードが、熱狂的にクラランを賛美するサン＝ブルーをいましめる書簡から始まる（書簡 1）。前半はクラランの共同体の報告が続き、書簡 2 ではクラランの経済や家政の状況が解説され、書簡 3 ではジュリの教育論が紹介される。書簡 5 では、実はヴォルマールが無神論者であったことが、サン＝ブルーからエドワードに明かされる¹⁵。そして再び、書簡 7 ではクラランにおける農業や収穫祭が描写される。

「第五部」の後半は様々な話題が交錯する。サン＝ブルーは、ヴォルマールに感謝を表明する一方で（書簡 8）、ジュリが死ぬ悪夢を見て錯乱しながら（書簡 9）、エドワードと娼婦のローレッタの恋愛をヴォルマールに相談する（書簡 12）。他方でジュリは、未亡人のクレールに、サン＝ブルーとの結婚をすすめる（書簡 13）。

「第六部」に入り、クレールはローレッタをクラランに迎えることに反対しつつ、自分とサン＝ブルーとの結婚を拒絶する（書簡 2）。エドワードは、自分の恋愛を利用して、サン＝ブルーが尊敬に値する人物かを試したのだとヴォルマールに述べ、ローレッタはエドワードとの結婚をあきらめて修道女になったと報告し（書簡 3）、ヴォルマールもサン＝ブルーを尊敬に値する人間であると認める（書簡 4）。クレールによるジュネーヴ賛美（書簡 5）の後、ジュリは、今度はサン＝ブルーに、クレールとの結

婚をすすめるが（書簡 6）、彼もクレールとの結婚の提案を固辞する（書簡 7）。

ここから物語は結末に向かって急展開をする。ジュリが、おぼれかかった次男のマルセランを助けようとしたことをきっかけに重篤になったと、サン＝ブルーは知らされる（書簡 9）。ヴォルマールは、サン＝ブルーにジュリの臨終の様子を語り、死に際して従容としたジュリの態度は、ヴォルマールを回心させる（書簡 11）。そしてジュリは、やはりサン＝ブルーのことが好きだった、という衝撃の告白を残してこの世を去る（書簡 12）¹⁶。クレールが悲しみをつづった短い手紙が最後の書簡である。

以上のように、本節では、『新エロイズ』の内容を要約した。

2. 自然的善性の意味

本節からは、『不平等論』と『新エロイズ』の異同を比較していく。まず、『不平等論』におけるルソーの主要な主張は、人間は自然的には善良である、というものであった。それでは、この自然的善性の主張の内容について、『不平等論』と『新エロイズ』との間で、何らかの変化が認められるであろうか。

『不平等論』において、人間は自然的に善良であるというのは、主に以下の二つの意味においてである。

第一に、「未開人は善人とは何かを知らないから、まさにそれゆえ悪人ではない」（OI, III, p.154）。未開人は善悪を知らないので、他人に悪意を持ちえない。従って、未開人は意図的に他人に危害を加えることがありえないのである。

第二に、未開人は「自然的な憐れみによって、誰に対しても自分から危害を加えることを抑制されている」（OI, III, p.170）。憐れみは他人に危害を与えることを潜在的に抑制するのである。

つまり、人間本性に悪や不正をなす傾向はあらかじめそなわっているのではないこと、そして憐れみが自尊心や自愛心を緩和し、また他人に危害を加えることを潜在的に抑制することが、『不平等論』における自然的善性の主張である。

では『新エロイーズ』においては、自然的善性について、どのように論じられているのであろうか。

まず、『不平等論』における自然的善性の第一の意味については、『新エロイーズ』においては仮説的な自然状態が設定されているわけではないので、自然人や原始人の善性は論じられていない。とはいえ、以下で見るように、自然的善性という言葉こそ使われてはいないが、人間本性は善良である、人間の心には生まれつき悪への傾向があるわけではない、といった自然的善性の主張と同じ内容の議論は、『新エロイーズ』においても見出すことはできる。

その前に、『不平等論』における自然状態と社会状態の対比とまったく同じではないが、『新エロイーズ』におけるそれに近い組み合わせをみておきたい。

それは、サン＝ブルーが述べる「第一部」書簡 23 における素朴なヴァレーの人々と、「第二部」書簡 14 から続く虚栄心が強いパリの人々との対比である。彼は「第二部」書簡 16 で、「社会の真の影響を判断する」ために、「もし社会が人間をより善くするということが確実なら」、ヴァレーの習俗よりパリの習俗の方がすぐれているということになるとして、ヴァレーとパリを比べている (NH, II, ii-16, p.242)。

一方で彼は、「第一部」書簡 23 において、高地ヴァレー地方の人々を、「素朴で穏和で、快楽を好むというよりも、むしろ苦痛から免れているために幸福で」(NH, II, i-23, p.79)、「もうけるためでも、有名になるためでもなく、生きるために生きていて」(NH, II, i-23, p.80)、「人々の目から幸福に見えるのではなく、自分たちが幸福であるからこそ、幸福である」(NH, II, i-23, p.83) 人々であると言っている。

他方で彼は、「第二部」において、都会や社交界の人々を、その言葉を文字通りに受け取ることができず（NH, II, ii-14, p.232）、その会話と意見と行為が一致せず（NH, II, ii-16, p.241）、徳を尊重せず、善悪や道徳を茶化しておしゃべりにしてしまい（NH, II, ii-17, pp.247-249）、「虚栄心から人間性を過小評価し、すべての善の行為の原因を、つねに何らかの悪徳の中に見出し」（NH, II, ii-17, p.249）、「あるがままの自分とは別のものになってしまっている」（NH, II, ii-21, p.273）と評している¹⁷。

またサン＝ブルーは、パリという大きな社会では「誰もが自分の利益を考え、誰も共通の幸福を考えず、個人的な利害がお互いの間でつねに対立するので、策略や陰謀が絶えず衝突し、相反する偏見や意見が現れては消える」（NH, II, ii-14, p.234）と述べている。

このようにして見ると、『新エロイズ』におけるヴァレーの人々は『不平等論』における素朴で善良で幸福な未開人と¹⁸、『新エロイズ』におけるパリの人々は『不平等論』における墮落した文明人と、それぞれ重なっている¹⁹。

以上のように『新エロイズ』からは、ヴァレーの人々とパリの人々、田舎の人々と都会の人々を対置する意図がうかがえる。もちろん、素朴で善良であるとはいえ、人間関係や経済活動の中で生きるヴァレーの人々は、自然人や原始人ではない。しかしこれらの対置は、『不平等論』における自然人と文明人に対応している。善良な未開人というイメージにしても、都会への批判にしても、それ自体としては、ルソーに独自の議論ではない。とはいえ、第三節の自然的善性の格率の議論とも関連するが、ルソーは墮落した都会の人々を、利害の対立という観点から非難していることに留意しておきたい。

次に、『不平等論』における自然的善性の第二の意味については、『新エロイズ』にも類似する表現を見出すことができる。例えばサン＝ブルーは、クラランの共同体を描写した「第五部」書簡 7 において、「ときにはまだ本性の声が、私たちの残忍な心を和らげることがあります」（NH,

II, v-7, p.603) と言う。

人間本性には、人間の残忍な性質を和らげるものがあるということである。これは『不平等論』における憐れみの規定と対応している。

しかし『新エロイーズ』における憐れみは、『不平等論』における苦しみへの生理的な嫌悪というだけでなく、他人の幸福や不幸への配慮としての側面も強い。憐れみについては機会を改めて論じることにして、本稿では自然的善性に焦点をしぼることにする。

では、『新エロイーズ』においては、自然的善性の主張と関連して、他にどのような論点があるであろうか。大別すると、人間は自然的には善良であるということの内実にかかわる議論（Ⅰ～Ⅲ）と、人間は自然的には善良であるのに墮落してしまうことがあるという墮落にかかわる言説（Ⅳ～Ⅵ）とがある。

まず、自然的善性の内実に関係する記述を見ていくことにする。

（Ⅰ）第一は、自然の性向についての議論である。サン＝ブルーは冒頭の「第一部」書簡 1 で、自分たちはまだ世間の偏見に染まっていないので、「まだこれほど若く、何も私たちの自然の性向 (*les penchans de la nature*) をゆがめていません」(NH, II, i-1, p.32) と述べる。ジュリもこれに答えて、「第一部」書簡 4 で「私の魂には、決して悪徳の傾向 (*des inclinations vicieuses*) はありませんでした」(NH, II, i-4, p.39) と言う。

ここでは、偏見によってゆがめられる前の「自然の性向」の存在が前提とされ、それは悪徳への傾向を備えてはいないことが示唆されている。

さらに、サン＝ブルーがジュリとヴォルマールの教育を賛美する「第五部」書簡 3 には、より詳しい説明がある。そこでジュリは、自然や人間本性の中には悪がなく、悪徳は悪い環境や悪い教育のせいである、というヴォルマールの主張に賛成している。それをサン＝ブルーは以下のように報告する。

ヴォルマールの説によると、どんな性格でもそれ自体では善であり健全です。夫はこう言います。自然の中に誤りはありません。本性のせいにされている悪徳はすべて、本性が悪い型をあてはめられた結果です。どのような悪人でも、その傾向が善く導かれた場合は偉大な徳を生み出さなかったはずがありません。(NH, II, v-3, p.563)

そうして「悪への傾向は予防されていますし、自然の正しさは認められていますので、私たちが自然のせいに行っている欠陥は、自然がしたことではなく、人間がしたことであると、すべてのことが私に証明しているようです」(NH, II, v-3, p.584)として、サン＝ブルーは人間の自然的善性を確信する。

サン＝ブルーは、「第五部」書簡 7 でも、繰り返している。「自然はすべての物をできるだけ善くつくりましたが、私たちがさらに善くしようとして、かえってすべての物を損なっています²⁰」(NH, II, v-7, p.610)。

このように、自然や本性のうちには悪や悪徳はなく、悪や悪徳は後から人間によってつけ加えられたものであるという主張は、『不平等論』における自然的善性の内容を繰り返している。

(II) 第二は、徳への愛についての主張である。まずサン＝ブルーは、「第一部」書簡 5 で「正しい感情はすべて、私の心の奥底にあるように思われます」(NH, II, i-5, p.42)と述べている。

また「第二部」書簡 11 のジュリは、パリに向かうサン＝ブルーに対して「あなたの魂の奥底に立ち返ってください。そこにこそいつでも、あなたは今までどのように何回も私たちを崇高な徳への愛 (l'amour des sublimes vertus) に燃え立てさせた、神聖な炎の源を見出すでしょう」(NH, II, ii-11, p.223)と説き、さらに「あなたはすべての善良で誠実なものを好む幸福な傾向 (cet heureux penchant à tout ce qui est bon et honnête) を天から授かっています」(NH, II, ii-11, p.225)と書いている。

第一の論点は、人間本性には生まれつきの悪への傾向はない、という

消極的な内容であったが、ここでは、人間（サン＝ブルー）の魂には善を好む性向や、徳への愛の源泉がある、という積極的な内容が明確に表れている。

（Ⅲ）第三は、善悪の識別という論点である。サン＝ブルーは学問を論じた「第一部」書簡 12 で「自分自身の中に立ち返ろうと思うとすぐに、各人は何が善いものであるかを感じ、何が美しいものであるかを識別します (*chacun sent ce qui est bien, chacun discerne ce qui est beau*)。私たちは善いもの、美しいものを知ることを人から教わる必要はありません」(NH, II, i-12, p.58) と主張する。

第二の論点は、第一義的にはサン＝ブルーの美しい魂についての議論であったが、この見解は、人間の自然的善性に関して、人間には善や美を感じ取る性質があるという、さらに一步踏み込んだ主張をしている。

次に、墮落をめぐる言説を見ていくことにする。

（Ⅳ）第四は、善良な本性は墮落しやすいという議論である。パリを観察する「第二部」書簡 17 のサン＝ブルーは、「社会における善を十分に受け取り、社会の悪徳を取り入れないしかたで、社会に許容されるように」(NH, II, ii-17, p.246) 努めながらも、都会においては「否応なく私の道徳的な情感の秩序を変え、くだらないものに価値を与え、本性と理性を黙らせ、私は内側に持っている崇高な模範がゆがんでいくのを見る」(NH, II, ii-17, p.255) という。

都会や社交界で生活していると、自分の本性や道徳が墮落してしまうように感じるというのである。

さらに、「第三部」書簡 21 では、サン＝ブルーは「天が私たちに与えた贈り物はすべて私たちにとって自然的に善いものであるとしても、それらの贈り物はあまりにも性質を変えやすいものです」(NH, II, iii-21, p.378) と、エドワードに語っている。

しかしこれに対して、「第三部」書簡 22 のエドワードは、「果たしてす

べての事物のなかに、少しも悪のまじらない善が少しでもあるかどうか、見て探してください。だからといって、そのことで世界には一つも善がないという意味になりますか。きみは本性から悪であるものと、ただ偶然によって悪をこうむっているものを混同してもよいのですか」(NH, II, iii-22, p.388)と返事をしている。

確かに、これまでサン＝ブルーが述べてきたように、人間は墮落しやすく、社会の中で善良さを保持することは難しい。もっとも、エドワードはサン＝ブルーの発言を強くとりすぎているところあり、サン＝ブルーは世界には善がないと言っているわけではない。とはいえ、エドワードが説くように、個別に邪悪な人間が存在することと、人間本性が一般に邪悪であることは違うのである。

(V) 第五は、本性は完全には消えないという主張である。「第二部」書簡 21 のサン＝ブルーは、「悪が先に出現しても、悪に妨げられて善が現れられなくなるということはありませぬ」と述べた後、「本性が完全に消え去ってしまうことはありません (on ne l[la nature]’efface jamais entierement)」と唱えている (NH, II, ii-21, pp.272-273)。

さらに彼は、パリの女性を評して、「真の徳から離れても、善をなすよりむしろ、決して悪をなさないことに、最も崇高な努力をしている魂の善性 (la bonté d’ame)」(NH, II, ii-21, p.277) を持っているとして述べている。

これに対してジュリは、「第二部」書簡 27 で「あの手紙を通して唯一あなたらしいところは、あなたが嬉しそうに彼女たちの善良な気質 (leur bon naturel) を称賛していることで、それはあなたの本性の名誉でもあります」(NH, II, ii-27, p.299) として、「第二部」書簡 21 のサン＝ブルーをほめている。

本性は変質しやすいかもしれないが、本性は完全に失われてしまうものではないということや、社会は利害を対立させるかもしれないが、都会においてさせ、他人に悪をなさないように努めている人々が存在することを、ルソーが書いていることは、いくら強調しても強調しすぎることはな

いと思われる²¹。

(VI) 第六は、子どもの教育に関する論点である。本性は完全に消えないとしても、やはり本性や善性は腐敗しやすい。そこで「第五部」書簡3のサン＝ブルーは、ジュリに教育の方針を尋ねる中で「この[子どもの]善良な気質は磨かれなければなりません (ce bon naturel veut être cultivé)」(NH, II, v-3, p.561) と言う。これに対するジュリの答えが、本節の第一の論点で挙げた独立引用文である。

さらにヴォルマールは「問題は、性格を変えることや、本性を曲げるのではなく、それをできるだけ伸ばし、つちかい、それが墮落するのを防ぐことです」(NH, II, v-3, p.566) と述べる。

このようなジュリとヴォルマールの方針を受け入れたサン＝ブルーは、彼らの子どもたちの教育を任されたことを喜ぶ「第五部」書簡8で、教育における課題は「自然の人間を社会に適合させることによって、損傷しないようにすること」であり、それは「ジュリの体系」を継続して発展させたものであると言う (NH, II, v-8, p.612)。

つまり、社会の中にあっても、本性や自然的善性を損なわないようにすることが教育の課題とされているのである。

以上のように、本節では『新エロイーズ』における自然的善性の主張と関連する議論を検討した。『不平等論』は自然状態における人間の善性を主張しているのに対して、『新エロイーズ』は自然状態を論じてはいない。また自然的善性という言葉もあまり使われていない。とはいえ、例えばヴァレーの人々は、自然人や未開人と似た特徴をそなえて生きる人々として描かれていた。

その上で、これまで見てきた六つの論点を整理してみる。一方では『不平等論』と『新エロイーズ』とで一貫している議論もあった。それは、人間は生まれつき本性的に邪悪なのではなく、悪は悪い教育や環境のせいであるという主張である (I)。

しかしそれはあくまでも、人間は外的な要因の影響で善良にも邪悪にもなりうるということであって、その意味では、自然的善性の主張と、人間はどのような状態でもつねに善であるという類の単純な性善説とは明らかに異なる。

他方では、自然的善性に関して『新エロイーズ』において新たに展開された内容であると考えられる論点もあった。具体的には、魂の奥底には、善や徳へ性向があるということ（II）、人間には、善や美を識別する性質があるということ（III）、人間本性は墮落しやすいが、個別的な悪の存在は、自然的善性を反駁するものではないということ²²（IV）、人間本性は変質しやすいが、本性は社会においても完全に消えてしまうわけではないということ（V）、だからこそ、社会において本性や自然的善性の墮落を防止することが、教育の課題であるということ（VI）、である。

『新エロイーズ』では、（II）や（III）の主張の根拠や、（VI）を可能にする教育が、十分に提示されているとはいいがたいが、少なくともルソーの議論が『新エロイーズ』で新しく展開されたことは指摘できるように思われる。

3. 自然的善性の格率

『不平等論』におけるルソーは、自愛心と憐れみから、「できるだけ他人の不幸を少なくして、自分の幸福をきずけ (*Fais ton bien avec le moindre mal d'autrui qu'il est possible*)」という「自然的善性の格率 (*maxime de bonté naturelle*)」を導いている (OI, III, p.156)。この格率は『不平等論』におけるルソーの倫理思想の核心である。

では『新エロイーズ』では、自然的善性の格率について、何か論じられているであろうか。自然的善性の格率という名前で呼ばれてはいないが、自然的善性の格率と関連のある表現は、随所に見出すことができる。

以下では、他人を不幸にしないという議論について（I）、家族や友人

や恋人の幸福について (II)、他人の幸福と自分の幸福の一致という論点について (III)、誰かを不幸にせざるをえない状況におかれたジュリの苦悩について (IV)、そして、クラランの共同体における幸福について (V)、というように、五つの観点から『新エロイズ』の記述をたどってみたい。

(I) 第一に、『不平等論』における自然的善性の格率とより直接的に対応する、他人を不幸にしないという主張と関連する議論を確認しておきたい。まず、「第一部」書簡1の冒頭で、サン＝ブルーはジュリに「私はあなたの幸福を犠牲にするかもしれないような幸福は求めません (*je ne voudrais pas d'un bonheur qui pût coûter au vôtre*)」(NH, II, i-1, p.31) と言う。

自分はなるべく他人を不幸にしない、ということである。ジュリという個人は他者一般ではないが、物語の出発点に、自然的善性の格率と近い内容の宣言が書かれているということを強調しておきたい。

また、第二節で述べたように、「第二部」書簡21のサン＝ブルーは「善をなすよりむしろ、決して悪をなさない」ように努めるパリの女性たちの「魂の善性」(NH, II, ii-21, p.277)を賛美し、「第二部」書簡27のジュリもそれを「善良な気質」(NH, II, ii-27, p.299)と称賛している。

さらに、「第三部」書簡21のサン＝ブルーは、神は「あなたのためになることをしなさい、そして誰の危害にならないことをしなさい (*fais ce qui t'est salutaire et n'est nuisible à personne*)」(NH, II, iii-21, p.384)と命じたと述べている。これは自然的善性の格率により近い表現である。

後半のクラランの共同体の描写にも、これに似た議論がある。例えば「第五部」書簡2のサン＝ブルーは、「善への第一歩は、悪をなさないことであるように、幸福への第一歩は、苦しめないことにあります」として、「この二つの格率は、よく理解すれば、多くの道徳上の戒律をなして済ませるもので、ヴォルマル夫人 [ジュリ] にとって大切なものです」と述べている (NH, II, v-2, p.531)。

また、そのようなクラランでは、「他人の利益のために一人の人間を害

することも、紳士の責務を果たすために悪人をつくることも、決して許されることではありません」(NH, II, v-2, p.536) とサン＝ブルーは加えている。

第一節でも確認し、本節でこの後見るように、『新エロイーズ』の中盤では、ジュリはサン＝ブルーとデタンジュのどちらかを不幸にせずにはいられない、という状況に立たされる。しかし、物語の終盤で、サン＝ブルーとクレールを結婚させようとするジュリに対して、「第六部」書簡 2 のクレールは「私とは幸せになれない人といっしょになって、私が幸せになれると思いますか」(NH, II, vi-2, p.646) と述べている。

過去にジュリと恋愛をしたサン＝ブルーは、ジュリその人ではないクレールと結婚しても幸福にはなれないだろうし、そのようなサン＝ブルーと結婚してもクレール自身も幸福にはなれないというのである。

また「第六部」書簡 7 のサン＝ブルーはジュリに「私は彼女 [クレール] の幸せを犠牲にして、自分を幸せにするようなことはしません […] 彼女を幸せにできなくて、どうして私自身が幸せになれるのでしょうか」(NH, II, vi-7, p.679) と述べ、「結婚することが義務であるとしても、それ以上により不可欠な義務は、誰をも不幸にしないという義務です」(NH, II, vi-7, p.680) と言っている。

サン＝ブルーは、クレールを幸福にできないから、または不幸にするから、そしてそうなのは自分も幸福になれないから、という理由でクレールとの結婚を断り、他人を不幸にしないことを義務としている。

冒頭でジュリの幸福を犠牲にする幸福を求めたと述べたサン＝ブルーは、六部に渡る物語を経てなお、その結末の近くでも、クレールの幸福を犠牲にした幸福を求めないと書いている。その意味では、『新エロイーズ』の全体を通して、自然的善性の格率は放棄されてはいないと言える。

ただし、「第一部」書簡 11 のジュリは「もしあなたが自分ために独占的な幸福を得たい、私の幸福を犠牲にしてもそれを得たいという希望を持っていたなら、そのような希望は捨ててください」(NH, II, i-11, p.55) とサ

ン＝ブルーに要求している。これは、他人を不幸にしないように生きることを、他の人々から求められる、という『不平等論』にはない議論である。

もともと自然的善性の格率は、自分の生き方についての規則である。また前述のように、サン＝ブルーは基本的には、自然的善性の格率を受け入れているようであった。では、なぜジュリは、サン＝ブルーの生き方についての格率を、わざわざ改めて彼に求めるのであろうか。

それは、ジュリが「私はあなたよりもはるかにあなたの心をよく知っている」からであり、ジュリにとってはサン＝ブルーに「関係のないような幸福」はなく、「二人の中で、自分の幸福と相手の幸福との区別が少ない者の意見を採用しなければならない」からであると説明されている(NH, II, i-11, pp.55-56)。

要するに、ジュリの方がサン＝ブルー自身よりも彼の幸福をよくわかるのであり、ジュリに任せれば、ジュリもサン＝ブルーも幸福になれるというのである。

サン＝ブルーも「第一部」書簡 12 で「あなたの幸福をきずいてください、そうすればすべてが達成されます」(NH, II, i-12, p.56) と返事をしている。

確かに、他人の方が、自分の幸福について、より冷静な判断をするということはありうる。とは言え、サン＝ブルーはジュリの意見を受け入れてしまっているが、自分の幸福についての判断を他人に任せてしまっよいいのか、という問題が生じる。ここには、ルソーの思想のパターナリストイックな一面が表れている。

ところで「第二部」書簡 8 のクレールは、サン＝ブルーに「あなたは、彼女 [ジュリ] の幸福を犠牲にして、いったいどのような幸福を享受できるのか、私には理解しかねます」(NH, II, ii-8, p.215) と述べている。

つまり、サン＝ブルーにとっては、ジュリが不幸でいると、自分も幸福になれないのだから、サン＝ブルー自身が幸福になるためにも、彼はジュリを不幸にするべきではない、と、クレールは説いている。自分が幸福

になるためにも、他人を不幸にするな、というのは、自然的善性の格率を展開させた内容ではないだろうか。

また、サン＝ブルーにとっては、これを、ジュリ本人から言われるよりも、クレールから言われる方が、説得力があるのではないかと思われる。そのような意味で、『新エロイズ』では、人間関係や道徳関係において、第三者が重要な役割を果たしていると言えるかもしれない。

以上のように、他人に危害を加えない、他人に悪をなさないなど、様々な言われ方がされているが、『新エロイズ』にも、なるべく他人を不幸にしないという考え方につながる内容は、冒頭から結末付近まで、いたるところに散見される。ただし、それらを他人から説かれるという場面もあった。

(II) 第二に、家族や友人や恋人の幸福と関連する議論を見ていく。まず「第一部」書簡 10 のサン＝ブルーはジュリに「幸福になってください。[…] あなたの幸福を私の不幸の慰めにしましょう」(NH, II, i-10, p.53)と述べている。

ジュリも、クレールの結婚を祝福して、サン＝ブルーに報告する「第二部」書簡 18 で、自分たち三人を「三人の中の一人が幸福であれば、他の二人の不幸を和らげるのに十分であるということこそ、私たちを結びつける友情の価値です」(NH, II, ii-18, p.256)と評している。

ここでは、恋人や友人の幸福が、自分の不幸を埋め合わせる、愛情や友情というのは、そのようなものである、ということが言われている。

また上掲の「第一部」書簡 10 のサン＝ブルーは、「私の幸福とあなたの幸福を一致させることができないのですから、私は自分の幸福を断念しました」(NH, II, i-10, p.53)とも続けている。

クレールも、「第三部」書簡 7 でサン＝ブルーに「共通の幸福が不可能になりましたら、恋人の幸福の中に自分の幸福を見出すことだけが、希望のない恋愛に残されたことなのではないでしょうか」(NH, II, iii-7,

p.320) と書いている。

一般化するなら、恋人や友人の幸福は自分の不幸を減らすのであり、自分と恋人や友人がともに幸福になれないときには、恋人や友人の幸福に自分の幸福を見出せ、ということになる。これらの主張は、自然的善性の格率を超えているが、自分と他人の幸福が対立してしまうときの一つの考え方を示唆しているように思われる。

さらに、「第三部」以降では、家族や恋人や友人の幸福が、自分の幸福にとって必要である、という訴えが繰り返される。クレールは「第三部」書簡7で、サン＝ブルーに「ただ娘の幸福だけが、自分の幸福に欠けているものです」(NH, II, iii-7, p.323) という、ジュリの母親の言葉を伝えている。

ジュリも「第三部」書簡18の「回心の手紙」でサン＝ブルーに「あなたが幸せにならない限り、私も決して幸せにはならないでしょう」(NH, II, iii-18, p.365) と述べている。これに対して、書簡19でサン＝ブルーから「あなたは幸せですか」(NH, II, iii-19, p.367) と問われたジュリは、書簡20で「私はあらゆる点で幸せですが、私の幸福にとっては、あなたの幸福だけが欠けています」(NH, II, iii-20, p.369) と答えている。

ヴォルマールと結婚したジュリの台詞としては、サン＝ブルーには残酷かもしれないが、ジュリがサン＝ブルーの幸福を気にかけているというのは、確かなことであるように思われる。

また「第四部」書簡5のクレールは、自分の家にサン＝ブルーを受け入れるヴォルマールについて「彼 [ヴォルマール] はあなたを回復させようとうします。そうでなければ、ジュリも、彼も、あなたも、私も、十分に幸せにはなりえません、と彼は言います」(NH, II, iv-5, p.417) と述べている。

そして「第六部」書簡8では、ジュリはサン＝ブルーにクレールとの結婚をすすめて「あなたの方が、お互いに幸福になれば、もう私の幸福に欠けるものはなくなります」(NH, II, vi-8, p.692) と言っている。

ジュリがサン＝ブルーにクレールとの結婚をすすめるというのは、身勝手な印象も受ける。しかし、ジュリやヴォルマールからすると、彼らは自分たちの幸福のために、サン＝ブルーの幸福を犠牲にしたと言えなくもないので、彼らがサン＝ブルーに負い目を感じ、サン＝ブルーにも幸福になってほしいと願うのは、理解できなくもない。自分が不幸にしてしまった他人の幸福を気づかうというのは、自然的善性の格率を展開させた内容であると考えられることもできる。

以上のように、『新エロイズ』では、一方で、恋人や友人の幸福は、自分の不幸を埋め合わせるのであり、また他方で、自分が十全に幸福であるためには、周囲の家族や友人が幸福であることが必要である、ということが言われていた。

(Ⅲ) 第三に、自分の幸福よりも、他人の幸福を優先するという点に関する論点がある。「第一部」書簡 3 のサン＝ブルーは、ジュリに「あなたの幸福を、私の幸福よりも大切に思っています」(NH, II, i-3, p.37) と述べている。

また、第一節で確認したように、「第一部」後半のジュリはサン＝ブルーに、使用人の結婚の手続きに助力するために、自分とのデートを我慢するように求めている。ジュリは「第一部」書簡 39 で「私たちよりも優れた人々が苦しんでいて、それに私たちが責任を感じる限りは、自分たちの快樂のことを話すのは、やめましょう」と説いて、「他人を幸福にする」ために「徳は犠牲を要求する」ことをサン＝ブルーに求めている (NH, II, i-39, pp.117-118)。

つまりジュリは、サン＝ブルーに、他人を幸福にするために、自分の快樂を犠牲にするように求めている。

これに対して「第一部」書簡 42 のサン＝ブルーは、ジュリが要求するのは「耐えがたい徳」であると言いながらも「あなたが命令することですから、服従しなければなりません」(NH, II, i-42, p.121) と答えている。

これに続く「第一部」書簡 43 のサン＝ブルーは、「愛する人に奉仕しながら善をなすことができることと、このように愛の魅力と徳の魅力と同じ心の中に結びつけることができることは、何と幸せなことでしょう」(NH, II, i-43, p.121) として、少なくとも表面的には、他人に善をなすことの喜びを認める。

ジュリは、それに応じて「第一部」書簡 44 でサン＝ブルーに説教を繰り返す。彼女の言い分は、まず「善い行いを軽蔑すると、良心の呵責 (remord) が一生私たちを苦しめる」ということであり、次に「幸せに値する若者たちを幸せにすること」は自分にも「快い」ということであり、さらにサン＝ブルーは「他人を喜ばせようとして、多くの人の幸せを彼らと私たちに与えた」ということであり、加えて「犠牲を払うことはつねに快く、善い行いをして後悔するような人はいない」ということであり、そしてサン＝ブルーを尊敬することで「あなたの中に自分を置いて、自分を尊敬したい」ということである²³ (NH, II, i-44, pp.123-124)。

ここで言われているのは、結局は、自分の幸福よりも、他人の幸福を優先するというであり、それは自然的善性の格率を超える内容である。ルソーは必ずしも善と徳を一貫して区別してはいないが、自分の幸福よりも、他人の幸福を優先するというのは、善の原理というよりは、徳の原理であると思われる。その意味でジュリはサン＝ブルーに、自然的善性の格率よりも高い要求をしている。

しかしジュリは、他人を幸福にすることの快さや喜びも説いている。他人を幸福にすることで、自分の幸福にもなるというのである。ここでは、端的に自分の幸福を犠牲にせよとか、自分の幸福を度外視して他人の幸福に貢献せよと、言われているわけではない。その意味では、自然的善性の格率が示す倫理思想のうち、自分の幸福と他人の幸福をともに考慮するという側面については、これらのジュリの発言のうちでも維持されている。

以上の議論を抽象化するなら、『新エロイーズ』では、他人を幸福にするために、短期的に自分の幸福を犠牲にすることは、長期的には自分にと

ってもより大きな幸福をもたらす、という主張が述べられていた。

(IV) 第四に、他人を不幸にせざるをえない事態が語られている。より広く作品を見渡すと、第一節でも見たように、『新エロイズ』の前半における、自分と恋人の幸福（サン＝ブルーとの恋愛）と、父親の幸福（ヴォルマールとの結婚）とが両立せず、どちらを選んでも、誰かを不幸にせざるをえない状況になってしまったジュリの苦悩という筋書きの全体が、言わば自然的善性の格率に対する一種の試練になっている。

父親からヴォルマールとの結婚をすすめられたジュリは、「第一部」書簡 29 でクレールに「私は両親か、恋人か、私自身を殺さなければならなくなりました」（NH, II, i-29, p.96）と述べている。

さらに、エドワードからサン＝ブルーとの駆け落ちを提案されたジュリは、「第二部」書簡 4 で、以下のように苦しい胸の内をクレールに明かしている。「私は有徳であろうとすると、[父への] 従順と [愛の] 誓約が、反対の義務を課します。私の心の性向に従うなら、恋人か父かどちらを選べばよいのでしょうか。ああ、愛と自然のどちらの声を聞けばよいのでしょうか。私はどちらかを絶望させることを避けることができません」（NH, II, ii-4, p.201）。

クレールはこれに答えて「第二部」書簡 5 で、以下のようにジュリ の状況を整理している。「あなたが何を取ろうと、自然はそれを認可するとともにそれを糾弾し、理性はそれを非難するとともにそれを是認し、義務は沈黙するか、自分自身に反するかのどちらかです。いずれにしても、結果は同じように恐ろしく、あなたは決めないままにいることも、善い選択をすることもできません。あなたは苦しみだけを比較しなければならず、そしてあなたの心だけがそれを判断するのです」（NH, II, ii-5, p.203）。そうして、クレールは、ジュリが何を選んでも彼女の味方であることを約束し、自分で決断をするようにと、彼女を促す。

そして「第二部」書簡 6 のジュリのエドワードに対する答えは、駆け

落ちは「愛にとっては十分であっても、至福 (felicité) にとっては十分ではない」のであり、父親を見捨てては、良心の呵責を避けることができず、また神の前に立つこともできない、というものである (NH, II, ii-6, p.208)。上掲のサン＝ブルーはジュリを不幸にすべきではないという「第二部」書簡 8 のクレールの発言は、彼がジュリの決心を尊重すべきであるという文脈で述べられたものである。

そうして結局ジュリは、ヴォルマールと結婚する²⁴。サン＝ブルーに結婚を報告する「第三部」書簡 18 で、彼女は「私以外の人々を犠牲にした私の幸福と、私の幸福を犠牲にした他人の幸福と、実際にどちらがより私にとって大切でしょうか」(NH, II, iii-18, p.358) と語りかけている。

そして「徳がなければ、私の心は幸せにはなりえないと感じ」(NH, II, iii-18, p.344)、「徳がなければ幸福がない」(NH, II, iii-18, p.365) と信じるジュリは、ヴォルマールと結婚しても「良心は私をとがめません。良心は誠実に耳を傾ける心を決して欺きません。これだけでは、世間で私を弁護するには十分ではないとしても、私自身の安寧にはそれで十分です」(NH, II, iii-18, p.364) と述べている。

ジュリは、他人 (父親やヴォルマール) の幸福を犠牲にしないようにするために、自分の幸福 (サン＝ブルーとの恋愛) を断念したことになる。そして、ジュリの良心は、それを認めるという。

これに対してサン＝ブルーは、「第三部」書簡 19 で「別れるほかありません」(NH, II, iii-19, p.366) としてジュリの決定を受け入れる。サン＝ブルーからすると、「第二部」書簡 8 でクレールからも言われたように、ジュリの幸福を犠牲にしないようにするために、自分の幸福 (ジュリとの恋愛) を断念したことになる。

それでは、自然的善性の格率は、ジュリとヴォルマールの結婚によって否定されてしまったのであろう

物語の前半は、主人公たちが他人の幸福を犠牲にしないために、あるいは他人に大きな不幸をもたらさないために、自分の幸福をあきらめると

いう筋書きになっている。またジュリの選択は、恋人と父親の少なくともどちらかを不幸にせざるをえないという立場に立たされた彼女が、なるべく他人に与える不幸が小さくなるようにした、苦渋の決断の結果である。つまりその意味では、ジュリやサン＝ブルーは自然的善性の格率を守って、なるべく他人を不幸にしないように行為したと考えることができる。

(V) 第五に、クラランの共同体における幸福を見る。「第四部」書簡 10 のサン＝ブルーによると、一方でクラランの「家政は、この家の主人たちの至福を示すとともに、その住人たちにもその至福を分け与えています」(NH, II, iv-10, p.441)。他方で反対に「家族の成員の幸福が、家長の幸福を増やします」(NH, II, iv-10, p.466)。つまり、クラランでは主人と使用人が、お互いにお互いを幸福にしているのである。

サン＝ブルーは説明を続ける。ジュリは「これらの善良な人々〔雇業者〕に自分の愛情をそそぐことで、彼らの愛情を得ます […] 彼女〔ジュリ〕は、彼らの喜び、悲しみ、境遇をともにします。彼らの身の上を調べ、彼らの利害を自分の利害にします」(NH, II, iv-10, p.444)。ジュリは使用人を愛することで、使用人から愛され、そのようにして境遇や利害をともにするという。

また、ジュリが言うには、未婚の使用人たちが出会う機会を提供することで「彼らが幸福な家庭をつくるように努めることで、私たちは自分たち自身の幸福を増やしています」(NH, II, iv-10, p.458)。使用人を幸福にすることで、主人たちもさらに幸福になる、というのである。

そして、ヴォルマール夫妻は使用人を「各人にとって、すべての同僚から愛されることが、大きな利益になるようにしむけます」(NH, II, iv-10, p.462)。クラランでは主人たちの配慮によって、使用人たちどうしの間でも、他人の幸福が自分の幸福になるように工夫されている。

また「第五部」書簡 2 でも、サン＝ブルーはクラランにおけるヴォルマール夫妻を描写している。「ヴォルマール夫人は、自分の高貴な義務を

果たし、自分の周囲の人々を幸福で善良にするのを好み、それはその対象となるすべてのものに、夫に、子どもたちに、使用人たちに伝わります」(NH, II, v-2, p.527)。また「彼女は善をなすことを楽しみ、善が役立つのを見ます。彼女が享受する幸福は、彼女の周囲に広がり、増えていきます」(NH, II, v-2, p.533)。そして「主人たちは自分たちの幸福を、自分の周囲の人々の幸福によってしか判断しません」(NH, II, v-2, p.548)。

つまり、ジュリの幸福や、他人を幸福にしようとするジュリの性向は、周囲の人々をも幸福で善良にするのであり、また、ヴォルマール夫妻は、周囲の人々を幸福にすることによって、自分たちも幸福になるのである。

このように、クラランの共同体では、使用人が他人の不幸に自分の幸福を見出さないように周到な配慮がなされ、主人と使用人が、また使用人どうしが、お互いに、他人を幸福にすることによって、自分も幸福を感じられるような人間関係や労働環境の維持が目指されている。その意味で、ヴォルマール夫妻によるクラランの共同体の統治の方針にも、自然的善性の格率の性質が反映されていると言える。

以上のように、本節では自然的善性の格率に関連する論点を検討した。『新エロイーズ』では自然的善性の格率と呼ばれはしないが、『不平等論』の自然的善性の格率の中に示されていた思想の核心部分は『新エロイーズ』でも一貫していた。しかしそれを超える論点も展開されていた。

その上で、上述の五つの論点を、順番を変えながら整理してみる。一方で、他人の幸福を犠牲にしない、他人を不幸にしない、ということは『新エロイーズ』の全体を通して重視されていた (I)。これは、自然的善性の格率の内容とより直接的に重なり合う。

他方で、自分の幸福より他人の幸福を優先すべきであり、他人を幸福にすることで、自分も幸福になるという議論があった (III)。クラランの共同体でも、他人の幸福が自分を幸福にするという議論があった (V)。これらで述べられていることの中には、自然的善性の格率を超える内容も

あったが、自分の幸福と他人の幸福をともに配慮するという点では、自然的善性の格率と共通する側面もあった。

また、友人や恋人の幸福は、自分の不幸を和らげるという論点があった(II)。ジュリは、サン＝ブルーとの恋愛と、ヴォルマールとの結婚の二者択一を迫られていた(IV)。これらは自然的善性の格率だけではうまくいかない事態のように思われるが、自然的善性の格率を全否定するというよりは、自分が幸福になれないときや、他人を不幸にすることが避けられないときの、対処のしかたを示唆するものでもあった。

このように『新エロイズ』においても、自然的善性の格率に表される倫理思想の中心部分は一貫して重要な役割を果たしている。さらに『新エロイズ』においては、自分の幸福と他人の幸福の関係について、様々な論点が示されている。

とはいえ、その上でなお、以下のことが問われなければならないだろう。それは、本当になるべく他人を不幸にしないで、自分の幸福をきずくような生き方は可能か、ということであり、言いかえれば、自然的善性の格率は実行可能か、ということである²⁵。

例えばサン＝ブルーは、ジュリを不幸にしないために、自分の幸福をあきらめ、ジュリの幸福を自分の幸福とすることにしたと言える。つまり、自分の幸福が他人の幸福と抵触するなら、自分の幸福の追求を差し控えるべきであるということと、他人の幸福のために尽くすことが自分の幸福にもなるということが述べられている。

このような『新エロイズ』の構成は、自然的善性の格率を否定しているというよりも、『不平等論』では示されていないが、なるべく他人を不幸にしない幸福の具体例が示されていると考えることができる。

そうは言ってもやはり、自分の幸福と他人の幸福を一致させることは困難である。しかし、他人が喜ぶのを見るのは、嬉しいことであり、その喜びが、自分の善意や行為によってもたらされたものであるならさらに嬉しい、ということがありうるのは、理解できなくはない。一般に、他人を

幸福にすることにともなう喜びや満足感は、否定的にとらえられてきたが、これらにもっと肯定的な評価を与えてよいのではないか、というのがルソーの問題提起であると思われる。

4. 展開の理由

第二節と第三節で論じたように、自然的善性の主張や自然的善性の格率に関して、『新エロイズ』においては、『不平等論』と一貫した議論もあったが、『新エロイズ』になって新しい論点が登場していたり、力点が変わっていたりするものもあった。最後に本節では、第一にそのような違いの理由について、第二に『新エロイズ』を執筆したルソーの意図について簡単に考察しておきたい。

第一に、『不平等論』と『新エロイズ』の間での展開の理由について検討したい。まず考えられるのは、著作としてのジャンルや、議論の名宛人が異なるということである。『不平等論』はもともとアカデミーの懸賞論文であり、自然状態とそこからの墮落についての仮説的な推論が展開されていたが、『新エロイズ』は恋愛小説であり、そこで想定されている読者は当時の貴族を中心とした小説を読む習慣を持つ階層であろう。

とはいえ、ジャンルや読者の違いだけが、思想の展開の理由ではないであろう。著作としての『不平等論』は、公刊のために書き直されたものである。またルソーは、『新エロイズ』の「第二の序文」では、「私は方法を変えたのであって、目的を変えたものではありません」(NH, II, SP, p.17) と言い、人々に向かって語る自分の作品として認知すると表明している(NH, II, SP, p.26)。『新エロイズ』は小説だからルソーの本意ではない、とする解釈は成り立たないであろう。

次に、議論の対象や問題設定が異なる、ということが考えられる。本稿の関心からその違いをまとめるなら、『不平等論』は自然状態における

人間（とその墮落）を描いているが、『新エロイーズ』は社会における人間を描いているということになる。そしてこの区別から、自然的善性の主張の内容の違いを、ある程度、説明できる。

自然人の自然的善性と、文明人の（持つことができるかもしれない）自然的善性とは、分けて考えることが必要かもしれない。一方で、人間は生まれつきに悪への性向を持っているわけではないという主張は、自然人にも文明人にもあてはまる。これは『不平等論』と『新エロイーズ』とで一貫していた。

他方で、善への性向や善を認識する能力が十分に発揮されるのも、教育によって自然的善性の墮落を防止することが課題になるのも、自然状態ではなく、社会においてこそである。これらは『新エロイーズ』において、新たに展開された議論であり、社会における人間に焦点をあてることで、より中心的な位置を占めるようになった論点であると言える。

第二に、それではなぜルソーは、社会や社会における人間を論じたのか、それを論じることで何を言おうとしたのかについて、いくらか検討してみたい。

まず、『新エロイーズ』の「第二の序文」と『告白』には、ルソー自身による『新エロイーズ』を執筆した動機の説明がある。

「第二の序文」は、やや批判的な読者 N と、ルソー自身を表していると思われる R との対話形式で書かれている。

まず、N の「いつも自分たちのことばかり考えている二、三人の恋人や友だちの小さな世界から何を教わるのですか」という質問に対して、R は「人類を愛することを教わります。大きな社会では、人は人間を憎むことしか教わりません」と答えている（NH, II, SP, p.14）。

次に、R は「彼らは他の世界から立ち離れ、そして自分たちの間だけで私たちの社会とは異なる小さな社会をつくり、そこに本当に新しい光景を作ります」（NH, II, SP, p.16）という。

さらに R は、「人々を幸福にするためには、この [大きな社会の] 格率の流れをせき止めようと努める必要があります。[...] 私たちに向かって愚かにも、善良になれと叫ぶべきではなく、私たちをそうなるように導く状態を愛させるべきです」(NH, II, SP, p.20) と述べる。

そして読者に「彼らの果たしうる義務と、彼らの状態にふさわしい快樂しか示さない」(NH, II, SP, p.22) 小説は、読者を賢明にし、読者は「幸福が自分たちの手に届く所にあるのを見て、幸福を享受する方法を知りましょう」(NH, II, SP, p.23) と言う。

そのためには、以下のことが必要であるという。「大きな社会の規範と戦ってそれを打破しなければなりません、それが虚偽であり軽蔑すべきものであることを、つまりその実像を示さなければなりません」(NH, II, SP, p.22)。

つまり「第二の序文」における R によると、『新エロイーズ』の意図は、読者に現状の文明社会の実情とは異なる人間や社会のあり方を示し、読者にふさわしい義務や幸福を表すことで、人類を愛することを教え、自分が善良であることができる状態を愛するように導くということである。一つには、このような問題に取り組むために、ルソーは社会における人間を描いたと考えることができる。

以上のような理由は、『不平等論』が残した課題にも対応しているように思われる。不正や悪徳は、自然状態には存在せず、社会において後からつけ加えられた、というのが『不平等論』におけるルソーの主張の一つであった。「社会は、必然的に、人々の利害が複雑になるにつれて、人々がお互いに憎み合い、お互いに表面的には尽くし合うが、実際には想像しうる限りのあらゆる害悪をお互いに加え合うようにしむけていることは、やはり真実である」(OI, III, p.202)。

自然人はお互いに意図的に危害を加え合うことはない。そうであるなら、このような事態は社会に特有の弊害である。しかし、社会における人間が、善良さを失わずに享受できる、自分にふさわしい幸福はありえない

のか。『不平等論』で徹底的に社会を批判した後で、ルソーがこのような問題に取り組む必要があると感じてもおかしくはない。『新エロイズ』において社会における人間が描かれたのは、『不平等論』の課題に対するルソー自身による一つの解答と考えることもできる。

ジュリヤサン＝ブルーは、なるべく他人を不幸にしないように、他人の不幸に自分の幸福を見出さないように生きようとしているように思われる。ジュリヤサン＝ブルーは不完全な存在であるが、不完全だからこそ、よくも悪くも魅力的なものであり、それぞれの場面を誠実に賢明に生きている。そのような彼らが有徳で幸福であろうとする姿が、読者の心を打ってきたのなら、少なくとも『新エロイズ』は読者に人間のあり方や社会のあり方を認識し反省する機会を提供してきているのではないだろうか。

その上で、ルソーは社会に生きる人間にふさわしい幸福を示すという問題に答えることに成功しているのか、という問題が残る。これについては、『新エロイズ』における名誉や自己尊重や相互承認の概念を検討しながら、改めて取り上げたい。

(よしだ・しゅうま 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程)

* ルソーのテキストからの引用は、プレイアード版全集 (*Œuvre complètes de Jean-Jacques Rousseau*, édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebon et Marcel Raymond, Bibliothèque de la Pléiade, 5 tomes, Paris, Gallimard, 1959-1995.) からの拙訳であるが、翻訳にあたっては各種邦訳を参考にさせていただいた。なお引用文中の大カッコ [] 内の補足や省略は引用者によるものである。

本文中の括弧 () 内のアルファベットは略称、大文字のローマ数字は全集の巻数、小文字のローマ数字とアラビア数字は『新エロイズ』の書簡の番号 (SP は「第二の序文」、アラビア数字は頁数を示す。 *Discours sur l'origine et les fondemens de l'inégalité parmi les hommes* (『人間不平等起源論』) は OI, *Julie ou La Nouvelle Héloïse* (『新エロイズ』) は NE, *Émile* (『エミール』) は E, *Confessions* (『告白』) は C と略記した。

1 以下の拙稿では、本稿と同じ問題関心から、『不平等論』から『エミール』へ

の思想の変容を考えるために、『道徳書簡』（1757-1758）を検討した。吉田修馬「『道徳書簡』におけるルソーの倫理思想の展開」、『エティカ』第2号、慶應義塾大学倫理学研究会、2009年、1-22頁。問題関心の連続性を示す都合上、本稿の「はじめに」と第四節の一部では、上の拙稿と重複する部分がある。

- 2 『不平等論』や『エミール』におけるこれらの議論については、以下を参照。坂倉裕治『ルソーの教育思想——利己的情念の問題をめぐる』風間書房、1998年、80-112頁、142-167頁。
- 3 『告白』では「第九巻」から「第十巻」にあたる時期にルソーに起きた出来事と、『新エロイーズ』の成立との関係を読み解いたものとして、戸部松実「小説『新エロイーズ』研究覚書（1）」（『青山学院大学文学部紀要』第15号、青山学院大学文学部、1973年、1-34頁）。
- 4 Jean Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau: la transparence et l'obstacle. Suivi de Sept essais sur Rousseau*, Paris, Gallimard, 1971 の卓見は、現在でも示唆深い。また、Robert Mauzi, *L'idée du Bonheur dans la littérature et la pensée françaises au XVIII^e siècle*, Paris, Albin Michel, Reprints, 1990 は、18世紀のフランスにおいて現世的で市民的な幸福がどのように描かれていたかを綿密に考察している。
- 5 飯岡秀夫『ルソーの「文明論」——「再生」の行方——』高文堂出版社、2002年、96頁。
- 6 戸部松実「小説『新エロイーズ』研究覚書（2）」、『青山学院大学文学部紀要』第16号、青山学院大学文学部、1974年、53頁。
- 7 哲学や倫理学の分野では、主にクラランの共同体を取り上げたものとして、Francine Markovits, “Rousseau et l'éthique de Clarens: une économie des relations humaines,” in *Stanford French Review* 15(3), 1991, pp.323-348 や、吉永和加『感情から他者へ——生の現象学による共同体論』（萌書房、2004年）がある。

政治思想の領域では、Judith N. Shklar, *Men and Citizens: A study of Rousseau's Social Theory*, London, Cambridge University Press, 1969 が先駆的業績である。近年では、藤井達夫「ルソーの政治思想における統治の問題」（佐藤正志編『啓蒙と政治』早稲田大学出版部、2009年、138-178頁、所収）が、統治や主体性のテクノロジーについてのフーコーの概念を用いてルソーのテキストを分析している。

社会学的な研究では、作田啓一『増補 ルソー——市民と個人』筑摩書房、1992年、上野千鶴子『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店、1990年、163-170頁。思想史的研究では、飯岡、前掲書。

- 8 『告白』におけるルソーは、二人の女性と、その片方の恋人である男性の恋愛や友情が、『新エロイーズ』における着想であり、その男性を自分に似せて、

自分の長所と短所をそなえさせたと述べている (C, I, p.430)。

なお、物語の後半では、ジュリはヴォルマール夫人となり、クレールはドルブ夫人となるが、本稿では引用文以外では、ジュリとクレールと呼ぶことにする。

- 9 ルソーの小説論と音楽論との対応関係については、戸部、前掲論文、61-67 頁を参照。
- 10 「ヴァレーの手紙」で、サン＝ブルーが享受したと述べている、いわゆる「存在の感情」については、本稿では『新エロイズ』においてその描写が存在することを指摘することにとどめることにする。
- 11 ルソーは原注で、自身も貴族であるエドワードが貴族を批判していることに注意を促している (NH, II, ii-3, p.200)。ルソーが、平民であるサン＝ブルーからだけでなく、エドワードからも貴族を激烈に非難させていることや、同じ貴族でありながらも、エドワードやヴォルマールとデタンジュのあり方が対置されていることには、注意しておいてよいように思われる。
- 12 ジュリの結婚や回心をどう解釈するかは大きな問題である。例えば、「回心の手紙」は、カルヴァン派的なキリスト教の思想を反映しているとする研究 (戸部松実「小説『新エロイズ』研究覚書——ジュリの回心とカルヴィニズムの倫理」、『青山学院大学文学部紀要』第 22 号、青山学院大学文学部、1980 年、99-116 頁) や、『新エロイズ』は結婚によって生じる近代的・市民的な家族の価値を顕揚した作品であるとする考察 (水林章『幸福への意志——〈文明化〉のエクリチュール』みすず書房、1994 年、240-271 頁) がある。

ところで、『告白』によると、ルソーが『新エロイズ』を執筆した意図の一つは、『百科全書』が巻き起こした、キリスト教徒と (唯物論的な) 哲学者との対立に対して、「偏見を打破することによって相互の憎悪を緩和し、一方の党派に他方の長所の徳を示し、それは人々の評価と人類の尊敬に値すると言ひ聞かせよう」とすることであり、そのために敬虔なジュリと無神論者のヴォルマールを、お互いに「一方を他方の力で愛すべきものにできるように」描こうとしたという (C, I, pp.435-436)。『告白』のこの発言を信じるなら、ジュリの回心も、キリスト教的な道徳と世俗的な (あるいは唯物論的な) 道徳の調和や、両者の長所をあわせ持つ道徳の提示といった文脈の中で考えることができるのではないか、ということを指摘しておきたい。

実際に、一方でジュリは「回心の手紙」でサン＝ブルーに「唯物論者にしても、本性の優しい声は彼らに対抗するよりよい根拠に他なりません」(NH, II, iii-18, p.360) と述べ、「キリスト教の道徳で哲学の教説を浄化するようにお願いします」(NH, II, iii-18, p.365) と書いている。しかし、他方で、クレールは

ジュリのキリスト教的な謙讓の徳を警戒している (NH, II, iv-13, p.500, vi-2, p.639)。

『新エロイーズ』において、宗教をとらえる上では、理神論的なサン＝ブルーと無神論者のヴォルマールとキリスト教徒のジュリの対立がまず考えられるが、上のようにクレールが果たす役割も大きいように思われる。また「第二の序文」の R が驚いているように (NH, II, SP, p.13)、子どもに教理問答も教えず、臨終の告解も拒否するというジュリのキリスト教は、かなり特異なものであることにも注意が必要である。

『新エロイーズ』における宗教の問題については、注 15 と注 16 も参照されたい。

- 13 「第二部」と「第三部」のジュリとサン＝ブルーは、境遇の転変に翻弄されて、冷静さを失っている。ルソーは原注で、「第二部」と「第三部」のジュリとサン＝ブルーは、理性を欠いていると述べている (NH, II, ii-1, p.189)。ただし、だからといって、ここにルソーの思想がまったく反映されていない、ということにはならないと思われる。

また、「第二部」と「第三部」では、特にクレールやエドワードの存在感が大きく、この二人がジュリやサン＝ブルーを支えている。彼らはお互いに、尊敬する友人や恋人にふさわしい存在であろうと努めている。『告白』のルソーは、『新エロイーズ』のテーマ系の一つが「恋愛と友情」(C, I, p.430)であると述べているが、ある意味では、「第二部」と「第三部」は、友情や恋愛が人間を高めるという主題をよく表しているのかもしれない。

- 14 このいわゆる「クラランの共同体」を、簡単に要約することは難しく、詳しく論じる余裕はないが、本論の趣旨と関係して、まず以下の二点を指摘しておきたい。第一に、大別するなら、ジュリは愛や配慮を、ヴォルマールは正義や合理性を象徴していて、お互いに補い合っているといことである。第二に、使用人や耕作人は、確かに夫妻に依存した存在であるが、ルソーは主従間の信頼関係を強調し、日常の不平等を収穫祭という祝祭空間の一時的な平等で埋め合わせようとしていることである。

第二点と関連して、クラランの共同体は、抑圧的で全体主義的な集団なのではないか、という疑念がありうる。しかし、例えばスタロバンスキーは、ルソーが時代的な制約を引き受けつつも、不平等や封建性を緩和するために、収穫祭などの様々な工夫をしていることに注目すべきであるとしている。ただしスタロバンスキーは、収穫祭で回復される平等は、感情的で瞬間的であり、制度として持続する力を持たない、一種の幻想であることにも注意を促している。

Jean Starobinski, *op. cit.*, pp.121-129.

さらに、クラランの共同体は「規律・訓練式権力による支配」によって管理されていると論じた議論（宮本陽子『『新エロイーズ』における声とまなざしの相剋』市川慎一編著『ジャン＝ジャック・ルソー——政治思想と文学』早稲田大学出版部、1993年、147-187頁、所収）がある。

これに対しては、クラランの共同体の特徴は、主従間と使用人相互の「愛情と愛着を媒介とした人的つながりにある」という応答がある（水林、前掲書、337-368頁）。ここではクラランの使用人や共同体を、近代的な個人や国民国家と同列に論じるべきではないし、ヴォルマールは不可視の存在ではなく、クラランにおける視線は相互的なので、クラランの共同体はフーコー的な監視社会ではないと結論づけられている。

- 15 ヴォルマールは冷淡ではあるが、誠実であり、無神論者ではあるが、キリスト教を尊重している人物として描かれている。ジュリも、夫の無神論をとがめるのではなく、むしろ憐れんでいる。しかしサン＝ブルーはエドワードに「無神論という立場は、他人の心を傷つけます」（NH, II, v-5, p.592）と評している。
- 16 ジュリの死もまた、解釈の分かれる問題であるが、衝撃的で悲劇的な幕切れは、少なくとも小説の結末としては、効果的だったのではないと思われる。ただし、ジュリが死ぬからといって、それまでの『新エロイーズ』の議論が、すべて否定されるということにはならないであろう。また、説得力があるかどうかは別にしても、ジュリの死によるヴォルマールの回心は、敬虔なキリスト教徒のジュリと無神論者のヴォルマールの和解というテーマと対応している。
- 17 ジュリも「第四部」書簡 12 において、ヴォルマールがヴァレー人の習俗を賛美していることをクレールに述べている（NH, II, iv-12, p.497）。
- 18 クレールが、開放的で率直であり、良識と洞察力があり、「自分が自然的に善良であることを感じている（Il se sent naturellement bon）」（NH, II, vi-5, p.658）と称賛する、ジュネーヴ人も、ここに加えることができるかもしれない。
- 19 この他に、『不平等論』における自然人と文明人とは厳密には重ならないが、「第四部」書簡 3 のサン＝ブルーは、「平和なインディアン」と、中南米の都市を破壊し「自分の利益になりえるなら、どのような損害も敵に加えるだけでなく、まったく自分に何の利益もないのに、できるだけ多くの損害を敵に加えることを、自分の利益に数えている」ヨーロッパ人とを対比している（NH, II, iv-3, pp.413-414）。
- 20 この箇所は、『エミール』冒頭の一節を思い起こさせる。「事物の作者の手を離れるときは、すべては善いが、人間の手の間では、すべては悪くなる」（E, IV, p.245）。
- 21 なお『不平等論』の特に「第二部」に関して、人類が墮落する過程においても、

憐れみは完全に失われるわけではなく、自然的善性の格率は社会に生きる人間にこそ意味があるのではないか、ということを経典で論じた。吉田修馬『『人間不平等起源論』における憐れみと自然的善性の格率の問題』、『エティカ』第1号、慶應義塾大学倫理学研究会、2008年、1-24頁。

- 22 この点に関連して、『新エロイーズ』においても、最善説や神義論について言及されることがある（NH, II, ii-18, p.261, v-5, p.595）が、これらの問題については『新エロイーズ』よりも、いわゆる『撰理についてのヴォルテール氏への手紙』（1756）が参照されるべきであるように思われる。

これらの問題については、以下を参照。川合清隆『ルソーの啓蒙哲学——自然・社会・神』名古屋大学出版会、261-317頁。

- 23 なお、物語全体を眺めるなら、第三節の第一の議論（Ⅰ）のうちのジュリがサン＝ブルーに自然的善性の格率を説くという場面や、第二の議論（Ⅱ）のうちで友人の幸福に自分の幸福を見いだすという教説や、この第三の議論（Ⅲ）のうちで恋人を尊敬することで自分を尊敬するというジュリの主張に関しては、恋愛や友情が人間を高めるという『新エロイーズ』の主題の中で考えられるべきかもしれない。

例えば「第一部」書簡24のサン＝ブルーは「恋愛の対象を高めることによって、自分を高めます」（NH, II, i-24, p.86）と言っているし、また「第五部」書簡1のエドワードも「心の傾向を抑制するには、自分だけで十分ですが、どのような傾向に従ってよいかを識別するには、しばしば他人が必要になり、それには賢明な人の友情が役立ちます」（NH, II, v-1, p.526）と述べている。

- 24 なぜジュリはエドワードの申し出を断り、ヴォルマールと結婚したのかという問題については、ジュリは父親を見捨てることで、「彼女があんなにも大切にされて来た「けがれの無い生活」のすべてを失うこと、そのような生活によってのみ得られる自己の感性の充足感を失うこと」を恐れたからであるとする論評がある。戸部松実「小説『新エロイーズ』研究覚書——ジュリの父親の役割について」、『青山学院大学文学部紀要』第21号、青山学院大学文学部、1979年、107頁。

- 25 ルソーは、1763年版で「第三部」書簡20につけ加えられた原注で以下のように説明している。「私たちの様々な状況は、否応なく、私たちの心の動きを決定し変化させます。私たちは自分の利益になる限り、悪徳で邪悪でしょうし、私たちがしばられている鎖は不幸にも、私たちの周囲にそのような利益を増やします。私たちの欲望の無秩序を矯正しようとする努力は、ほとんどつねにむなしいですし、その努力が真のものであることはとてもまれです。変えなければならないのは、私たちの欲望よりもむしろ、欲望を生み出す状況です。私た

ちは善良になりたいなら、自分たちが善良になれないようにしている関係を取り除くこと、それ以外に方法はありません」(NH, II, iii-20, p.1558)。

敷衍するなら、欲望を減らそうとするのではなく、他人の損害が自分の利益になってしまうような関係や状況に、自分の身を置かないようにせよ、とルソーは唱えているが、それは実際には難しいことである。ここではルソーは意外にも、自然的善性の格率そのものよりも、自然的善性の格率の実行を可能にするような状況を問題にしている。しかし『新エロイズ』の本文では、ジュリヤサン＝プルーの生き方を提示することを通して、自然的善性の格率を守るための方策を示しているようにも思われる。